

# 全国婦人新聞社取材写真コレクション ——女性のエンパワーメントの軌跡——

勝野真佐子

## 1. はじめに

国立女性教育会館30周年記念イベントのひとつとして、2007年11月12日から12月16日まで、女性教育情報センター前の展示ホールで、「女性アーカイブセンター開設先行展示」が開催された。「奥むめおコレクション」「稲取婦人学級資料」に関する、希少な資料が並ぶ会場の空間を彩ったのが、「全国婦人新聞社取材写真コレクション」だった。ここに展示されたのは、1980年から1990年まで11年間に、「全国婦人新聞」(全国婦人新聞社発行、後の「女性ニュース」)に掲載された取材写真の中から選ばれた約500点で、舞台美術家の尼川ゆら氏による斬新な演出によって、参観者たちの目を大いに引くことになった。

今回展示された写真は、主に全国組織の女性団体の行動や国際的機関で行われた会議、NGOと行政の対話、また、国立女性教育会館を舞台とした催事などが中心である。これらのコレクションの中には、女性の地位向上に向けて、地域で独自の活動に奮闘している市井の人々を取り上げた写真が数多く保管されている。それらの写真が掲載された「全国婦人新聞」(「女性ニュース」)の本紙関係記事を読むことで、女性たちの活動の動機、機微を知ることができ、コレクションの今後の活用が期待される。

筆者は「全国婦人新聞」(「女性ニュース」)のスタッフとして、約27年間この編集に携わった。そこで、これらの写真群と密接な関係にある「全国婦人新聞」(「女性ニュース」)という、聞きなれない媒体について触れておこう。

## 2. 草創期

「全国婦人新聞」(「女性ニュース」)は、国内唯一のインディペンデントの女性問題専門紙である。休刊まで一貫して、特定の政党、団体などのバックアップを得ず、商業ベースで発刊し続けた新聞である。

同紙は1950年、兵庫県姫路市でミニコミ紙として誕生した。創刊したのは、故・柴田たき(1901～1997)。夫に先立たれた柴田が、地元選出議員が女性有権者の集票をねらうために創刊を試みた新聞作りのスタッフに採用されたのがきっかけだった。以下は、生前の柴田からの伝聞によるものである。

学生時代から作文が得意で、新聞記者にあこがれていた柴田は、夫の死後、職安に「新聞記者希望」で求職した。これを知った議員は出資を申し出、さらに柴田に社長になるよう促す。ここに、同紙の前身「婦人新聞」が生まれた。当初スタッフは5人。柴田も社長兼記者、営業と何役もこなした。現在のような便利な交通機関もなく、遠路の取材は徒歩だった。尾根道から転落し、気づいたら農家の井戸の傍らに倒れていたこともあるという。

やがて、柴田は拠点を大阪に移し、1953年、紙名を「関西婦人新聞」と改題、新聞発行に加え、料理学校の経営にも着手する。現存する新聞が1974年からしかなく、当時どのような紙面だったのか知る由もないが、柴田の述懐によると、料理学校も順調で大阪市内で社用車を走らせるほどの隆盛であったという。

創刊のころの日本は、敗戦後の復興期にあり、所謂“朝鮮特需”で沸いていた。そして、草の根の女性たちの活動の萌芽をみた時代であった。当時、台所を預かっていた女性たちは生活に直結した問題解決のために、消費者運動を盛んに行っていた。「関西婦人新聞」

も、地域の消費者団体や未亡人会（当時）、地域婦人団体などを中心に取材活動を行っていたようである。

### 3. 成長期

1970年、全国展開を求めて東京に進出。同時に、タイトルを「全国婦人新聞」と改める。「女性による平和と平等を推進」をモットーに、月3回（一時週刊）のペースでプランケット版の新聞を発行した。日本経済の高度成長期の影響もあり、会社の経営状態はよく、多くの従業員を抱えていたようだ。

このころは主婦論争、婦人論、ウーマン・リブ運動などが展開された時期であった。当時の紙面を読むと、スタッフがこれらの問題に高い関心を持って入社、記事を書いていたことをうかがい知ることができる。

1967年、第22回国連総会で、「婦人に対する差別撤廃宣言」が採択され、1975年の国際婦人年には、男女の性別役割分担に異論を唱えた「メキシコ宣言」が出された。そして続く1976年からの「国連婦人の10年」、1995年、第4回世界女性会議と、女性の地位向上に向けた国際的な潮流に日本も巻き込まれていく。

### 4. 安定期

国際的な女性の権利確立を求めるうねりによって、日本の女性たちはまさに激動の時代を迎えることになる。1975年のメキシコ会議から5年。1980年、デンマークのコペンハーゲンで第2回世界女性会議が開かれ、日本の女子差別撤廃条約への署名というトピックや、NGOフォーラムに参加した日本の女性グループにより次々と開かれた興奮冷めやらぬ婦国報告会といった記事が「全国婦人新聞」（「女性ニュース」）の紙面を飾った。当該コレクションの写真を所蔵していたスタッフが入社したのはこの時期である。

1980年の女子差別撤廃条約の署名と続く条約の批准に向けて、男女の平等な権利実現のため、男女雇用機会均等法など国内法の整備が行われ、女性だけでなく男性の意識改革のための学習会が官民間わず頻繁に開かれていた。紙面ではこうしたニュースを報道する一方、地域で地道に活動する女性グループを紹介、あるいは活躍する個人にスポットを当てインタビューを

試みている。写真の肖像は、女性たちが取り組んでいるさまざまな課題をつづる貴重な糸である。

「国際婦人年」以来、日本の女性たちは諸外国の女性の状況にも目を向け、第二次世界大戦の戦後補償問題などに取り組んできた。同紙では、平和問題を初めこうした動きを丹念に拾っている。

商法改正などの社会的経済の影響を受けながらも、「全国婦人新聞」（「女性ニュース」）は、日本で唯一の女性問題専門の独立したメディアとして報道を続けていく。このような長年にわたる女性の立場からの報道が評価され、1992年、日本ジャーナリスト会議の「特別賞」を受賞した。

1995年6月、時代の動きにあわせて、発行新聞名を「女性ニュース」と改める。同年9月、北京で行われた第4回世界女性会議で採択された「行動綱領」では、21世紀を男女共生社会にすることが高らかにうたわれ、これを頂点とした女性たちの男女平等への活動はここで一気に噴出。意思決定機関・政策決定の場への参画へと弾みがついた。「女性ニュース」は、国内外の女性の活動を報道し、「女性による女性のための情報発信源」となった。

### 5. 結論にかえて

「全国婦人新聞社取材写真コレクション」は、1979年（一部1976年ごろから）から2006年6月まで、取材スタッフが、記事執筆のために取材・撮影した写真である。残された写真群は総点数3万5000点（推計）におよび、現在、鋭意整理中である。前述したように、これらの写真は、同紙の関連記事と一体のものであり、個別に切り離すことは、困難である。いわゆる記録としての報道写真ではないが、マス・メディアが報道することが少ない、日本の草の根の女性の活動をたゆまず追うことで、期せずして、日本女性のエンパワーメントの軌跡を明らかにすることになった。

同コレクションの写真が相当数残されたのは、休刊時に在籍していたスタッフの勤務年数が長かったことに起因している。長い者で約30年、撮りためた写真を少しずつ保管してきたからだ。さして労働条件がいいとはいえ小さなメディアでここまで長期にわたって、報道し続けられたのは、「国際婦人年」以降、顕著になった女性の地位向上に向けたさまざまな事象に取

材を通してふれたことが大きい。さらには、ナショナルセンターとして開設した国立女性教育会館が、まだ黎明期にある日本の女性の意識を高めるためのプログラムを展開、その取材を通して女性の抱える問題を系統的に知ることができたからだ。

誤解を恐れずに記せば、コレクションの写真を所蔵していたスタッフ全員が、入社時から婦人問題に関心があったとは言いがたい。各人が中途採用で、それまでの専門分野も異なり、先輩記者たちの会話に飛び交う「メキシコ、コペン、コペン…」という単語の羅列に、「???」が浮かんだのは一度や二度ではなかった。過去の紙面を読み、取材を繰り返す中で、「メキシコ」や「コペン」の謎は解けていくが、「国際婦人年」に連綿とつながる先人女性たちの運動があったことや、その当時「国際婦人年」自体に無知であったことに気づき、愕然としたものである。ウーマン・リブ系女性たちの集会の取材に目を白黒させ、消費者団体や平和団体の訴えに耳を傾け、そうこうしていく中で、「女性の権利は人権である (Women's Rights is Human Rights.)」ことを体感する。いわば、「全国婦人新聞」(「女性ニュース」)とともに、取材という学習活動を繰り返し、記事をつづるために調査・研究し、その中で培った視点で次の取材先を選択していくという実践の繰り返しであった。かつて婦人問題といわれたものが女性問題となり、ジェンダー問題へと変わるのと併行

し、「全国婦人新聞」(「女性ニュース」)のスタッフの視点もまた同様にシフトしていったことはまことに興味深い。

2006年、「女性ニュース」は経営上の理由から6月20日号をもって休刊することを決意。これまでに撮りためた写真を、有効に活用する方法がないかと模索していたところ、国立女性教育会館の女性アーカイブセンター開設に伴う資料収集という好機に恵まれた。点数が膨大なことからかなりの写真が廃棄されていたが、残された写真が散逸することなく同一場所に保管されることになった。後世、日本女性たちの活動について知りたい人々、あるいは研究者にとって役立つ資料になることを期待したい。

〈参考文献〉

1974 - 2006 『全国婦人新聞 (1995年『女性ニュース』に紙名変更)』 全国婦人新聞社

『毎日新聞』 1989年12月14日号 毎日新聞社

総合女性史研究会編 1993『日本女性の歴史 文化と思想』 角川書店

金森トシエ 1975『たたかう女100年』 世紀社

(かつの・まさこ 国立女性教育会館情報課)



女性アーカイブセンター開設先行展示における「全国婦人新聞社取材写真コレクション」コーナー